

大日ほたるの里公園のメタセコイア 太古の森林と気候

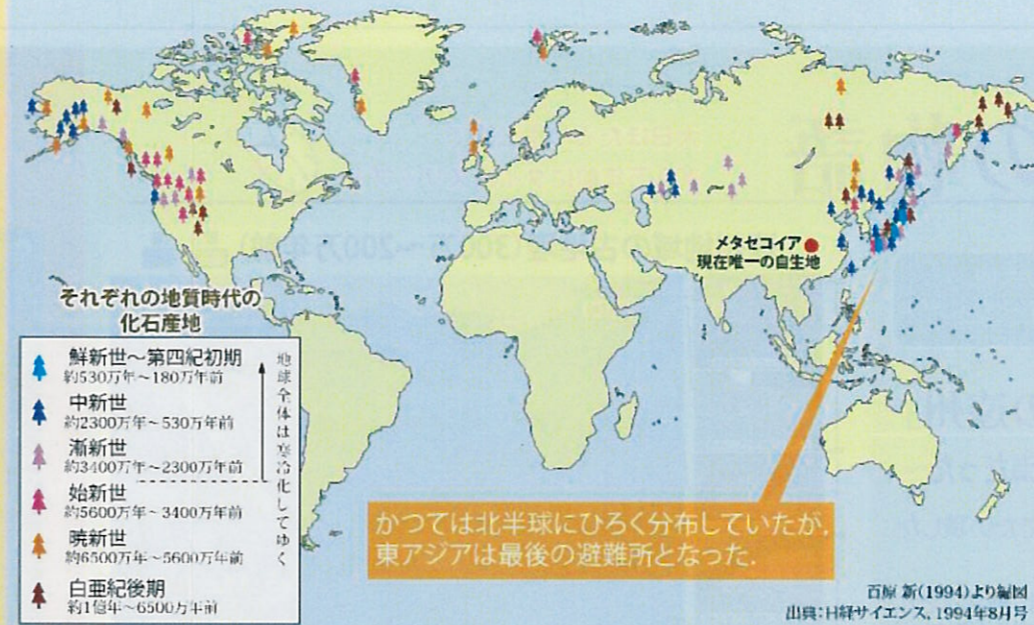
約200万年前の日本列島には、メタセコイアをはじめ、スイショウ、フウなどの植物が栄えていました。しかし、その後の第四紀の環境変動によって消滅しました。

これらの植物の化石はメタセコイア植物群と呼ばれ、温暖で湿潤な気候を示す証拠とされています。メタセコイア植物群の化石は袋井の地層からも産出します。

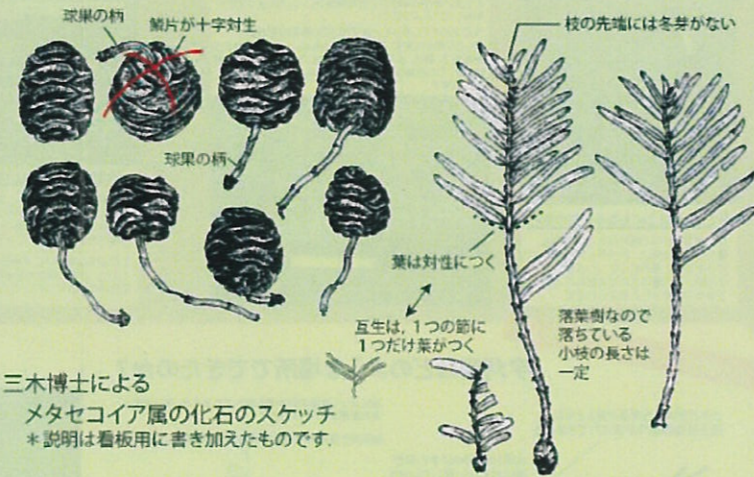
メタセコイア属は、始新世の約5000万年前、地球全体がもっと暖かかった時代には日本だけでなく北半球に広く分布していました。

200万年前の日本は、そのような太古に繁栄した植物が生き残っていた場所のひとつだったのです。

メタセコイア属の分布の時代的な変化



メタセコイア属の特徴 球果や小枝を観察しよう



三木博士による
メタセコイア属の化石のスケッチ
*説明は看板用に書き加えたものです。

出典: Miki, S. (1941) Japanese Journal of Botany

「生きている化石」メタセコイア

メタセコイアは、もともとは東海～近畿地方の化石として、古植物学者である三木 茂博士によって1941年に報告されました。

ところが、1946年に中国で生きているメタセコイアが報告され、世界中で大きなニュースになりました。その後、日本にも苗が配布され、今では国内の公園や学校でも見られるようになりました。

メタセコイアはかつては北半球に広く分布していたのに、その自生地は中国のわずかな場所にしか残っていません。また、恐竜が生きていた白亜紀後期の地層から出てくる化石と比べても、ほとんど形が変化していません。これらのことから「生きている化石」として有名です。

「ほたるの里公園」から出た植物化石

公園の造成中にあらわれた宇刈層からも、オオバタグルミのようなメタセコイア植物群の要素が産出しました。

ハンカチノキは、中国南西部の山地にしか自生していない落葉性高木で、ハンカチのような白い二枚の苞(ほう)をつけます。1869年にフランスのダヴィッド神父によって発見され、ジャイアントパンダとともにヨーロッパに紹介されたことで有名です。日本では7例目となる化石発見です。

